

# 最新世界史図説 タペストリー

十七訂版

「ヒストリーシアター」コーナー  
教師用解答・解説

## 〔各設問の分類〕

- 見** このマークがつくものは、授業時にヒストリーシアター内の写真を観察させることで、単純に答えがわかるものです。資料活用問題の訓練や、授業のアクセントなどにお使いいただけます。
- 考** このマークがつくものは、ヒストリーシアターにある写真などの情報から、推理を行うことで答えにたどり着くものです。授業で歴史的概念や用語、時代・事件の底流を把握させるときなどにお使いいただけます。
- 調** このマークがつくものは、ヒストリーシアター外の年表・図版、教科書などから、高校世界史レベルの調査をすることで、答えにたどり着くものです。宿題・レポートなど、授業後の復習・発展課題・考査時にお使いいただけます。

※これらの設問は、「観点別評価」（「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」の4観点があります）の際にも、4観点のチェックに先生方のお考えに応じてご活用いただけます。

## 〔解説中のページ番号について〕

この冊子の解説に示されるページ番号は、本体の方のページをさしています。

帝国書院

に自分たちの髪型である辮髪を強制した。

**解説** 満州族は北京入城の翌日、辮髪令を命じた。辮髪とは中国の北方民族に特徴的な髪型で、頭髪の一部を残して剃り、その残した部分をお下げのように編む髪形。当時は「留頭不留髪、留髪不留頭」といわれ、違反者を死刑とした。その後、民間に普及し、中国的な髪形として世界に知られるようになった。清末の太平天国は反清思想により辮髪をやめて頭髪を伸ばしたので、「長髮賊」とよばれた。なお、満州族の場合は1本に編むが、モンゴル族は左右に2本とした。

**発問例2** 人口的に圧倒的少数派の満州族が、なぜ300年近くも中国を支配することができたのか、その理由を調べてみよう。

**解答** 清軍が北京入城を果たした頃の満州族の兵力はわずか15万人と推定される。これだけの軍力で中国を支配するのは不可能であったので、彼らは漢族に対する弾圧策(ムチ)と並んで協調姿勢(アメ)もみせた。すなわち、社会的指導者である士大夫層に受け入れられるために、大規模な編纂事業を起こし、儒学者を優遇したのである。康熙帝(図②)、雍正帝(図③)、乾隆帝(図④)の3代の皇帝期に編纂された『康熙字典』『古今圖書集成』(巻末折込図②③)、『四庫全書』(p.121図①)の本は、いずれも現在も利用価値の高いものである。また、このような仕事は学者の思想調査ともなっていた。さらに、明代に続き科挙が実施され、政治面では満漢併用制が知られている。ただし、科挙も満漢併用制も、実質的には満州族に有利であった。

## P.120 明・清代の社会と文化 【中華思想に与えた衝撃】

**解答見考** それまでの中華思想では、中国が世界の中心であると考えられていたが、この地図では中国が大きく中心に描かれていなかったから。

**解説** 中国では古来より、「中華」こそが世界の中心であり、その周辺地域は夷狄であるとする中華思想が世界観の基盤をなしていた(中華思想についてはp.97図⑤参照)。マテオ=リッチは、自身がヨーロッパより持参した地図にみられるような、大西洋を中心におく図取りではなく、中華思想に配慮して中国が極力中心に近くなるよう、アジア大陸を中心におく図取りへと変更した。それでも、この地図を初めて見た人々は、中国のほかにも世界がこれほど広がっていたということに衝撃を受けた。この「坤輿万国全図」は、マテオ=リッチが弟子の李之藻とともに北京で作成したものであるが、私蔵を除いて、現物は中国には残っておらず、マテオ=リッチ自身が署名をしたものがヴァチカン図書館に所蔵されているほか、宮城県立図書館と京都大学附属図書館に版本が残されている。

## P.124 イスラームの出現と拡大 【ムスリムなら一度は行きたい聖地メッカ】

**解答見** ムスリムは平伏して、額を地面につけながら、メッカのカーバ神殿の方角に向かって礼拝している。

**解説** ムスリムの義務として、五行(P.125図⑦参照)が定められている。その一つに、1日5回の礼拝がある。礼拝は、どこにいてもメッカのカーバ神殿の方角を向いて行われ、とくに金曜日正午の礼拝は、各都市の中心的な大モスクで行われる。熱心なムスリムの額の祈りダコは、ザビーブ(干しぶどうの意味)とよばれ、礼拝を毎日続けた価値ある証とされる。またカーバ神殿には、大天使ガブリエルがアブラハムに渡したという黒石がある。はじめ白かったこの石は、人間の罪のために黒く変色したといわれる。

**発問例1** 人間平等を教義とするイスラームでは創唱者のムハンマドも人間であるとされている。そのためムハンマドは通常なんと呼ばれているだろうか。またその呼称はどのような意味を含んでいるだろうか。

**解答考** ムハンマドは「最後にして最大の預言者」である。イスラームでは5大預言者、ノア、アブラハム、モーセ、イエス、ムハンマドが認められており、ムスリムにとっては、ムハンマドの死で預言者はもう登場しないということになっている。ちなみに、ムハンマドに啓示を行ったのはガブリエル(ジブリール)である。ガブリエルは、『旧約聖書』ダニエル書にも登場し、『新約聖書』ではマリアに受胎告知を行った天使としても知られ、これら三つの一神教に共通する大天使である。

**発問例2** p.124①を見て、ビザンツ帝国とササン朝が争った結果、どのような事態が生じたか、考えてみよう。

**解答考** 両国の紛争地帯を避けるため紅海ルートがさかんとした。また7世紀には両国とも紛争に疲弊していた。

**解説** 両国の紛争により、ペルシア湾ルートは衰えた。一方紅海ルートのうち海上路は帆船に積み替える不便さもあって、紅海に沿った陸上路のほうがより繁栄することになった。当時のアラビア半島は砂漠化が進み、定住民は遊牧化して北上するなど社会的な激動の時代であった。またアラビアは他のオリエント諸国と同様多神教の世界であったが、エジプトがキリスト教化し、半島南部のヒムヤル王国が一時ユダヤ教化するなど、一神教の影響が強まりつつあった。そのような情勢の中、夏は北のシリアへ、冬は南のイエメンへ、という地の利を生かしたメッカのクライシュ部族が繁栄するようになっていた。

## P.126 イスラーム世界の変容 【イスラームの剣】

**解答考** ひげを生やしていないことから、ムスリムではないと考えられる。

**解説** 「あごひげは伸ばし、口ひげはそれ」というムハンマドの言葉が伝えられているように、ひげはムスリムのしるしでもあり、男性の威厳のしるしでもあった。そのため、ひげがないものは、宦官か異教徒、さもなければ男色者の証であった。図②では、ひげがない異教徒の奴隷を売買している。また、当時の金・銀貨には欠けたものがあり、売買の際には重量を量る必要があったので、秤が用いられているのも興味深い。奴隷は、一般に家内奴隷や軍事奴隷が多く、奴隷の結婚、蓄財、信仰の自由は認められていた。また、奴隷身分からの解放はムスリムの善行として奨励されていた。

**発問例1** マムルークがさかんに購入された理由について調べてみよう。また、どのような民族が多く購入されたか調べてみよう。

**解答考** イスラーム帝国は急速に拡大したため、カリフは強力で自らに忠誠を誓う軍隊が必要となった。その場合、軍人奴隷(マムルーク)が好適であった。理由としては、家族から切り離されているのでカリフに絶対的な忠誠を誓う、出世してもその地位